

櫛桁一則氏インタビュー「岩手県沿岸部の上映活動 2011-2018」

『映画上映活動年鑑 2017』（2018年3月 / コミュニティシネマセンター発行）より

映画館「みやこシネマライン」

震災の前から、岩手から福島に至るまで三陸沿岸部には「みやこシネマライン」以外、映画館がない状態が長く続いていました。沿岸の久慈市、宮古市、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市には、かつては映画館がありました。宮古では、1991年に「国際劇場」が閉館して市内に映画館がなくなりましたが、シネマラインが1997年に開館しています。陸前高田市には「公友館」という映画館がありましたが、シネマラインができてほどなくして閉館しています。

シネマラインの母体である「みやこ映画生活協同組合」ができたのは1996年です。全国の興収・動員数が最低を記録したのも1996年で、映画興行が一番落ちているときにシネマライン設立の地盤が固まったのですから、すごいことですね。宮古は生協運動が盛んな地域で、1995年に新しい生協のショッピングセンターができることになっていたため、市民一人ひとりが少額でも出資して「みやこ映画生活協同組合」という組織をつくって、このショッピングセンターの中に自分たちの映画館を作ろうということで、日本初の生協による映画館がスタートしました。

開館から15年経った2011年3月11日に東日本大震災が起きました。宮古市内でも映画館がある地域はほとんど被害がなく、映画館はすぐにでも開けられる状態でしたが、町の状況を見て、2週間後に再開しました。ちょうど春休みだったので『ドラえもん』と一般向けの映画を2本ぐらい上映しました。いつも春休みは、映画館は子どもたちで賑わうのですが、市内では子どもの姿を見ることが少なかったため、子どもたちのことが気がかりでした。映画館に子どもたちがきてくれたときには少し安心しました。



みやこシネマラインのエントランス



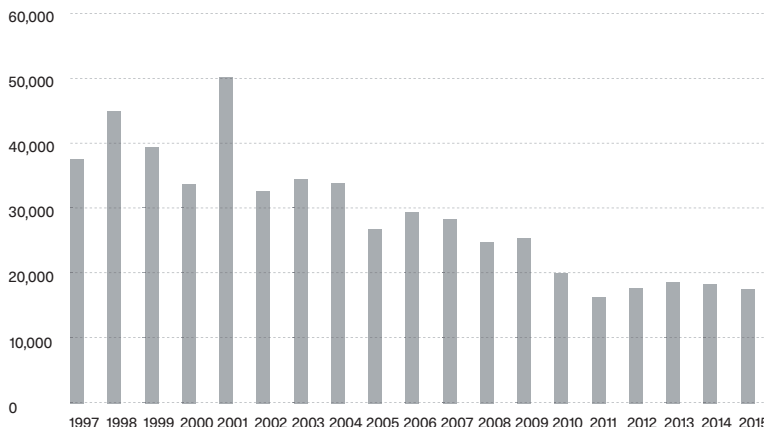
みやこシネマライン最終上映

映画館と移動上映

震災後、1、2年で、それなりに観客数は回復しましたが、2013年からは右肩下がりに入場者数が減っていきました。宮古は人口約5万人の町ですから、そもそも、映画館の経営は難しいのですが、最盛期には年間5万人来ていたこともあって、それはすごいことだったと思います。

人を削ったりしてやりくりを続けていたところに震災が起きました。その時点でやめる判断もできましたが、映画館を

みやこシネマライン入場者数の推移



再開したときに、子どもたちが映画を楽しんでいる姿をみて、経営は度外視して、自分たちにできることをやってみようと、地元の映画館として、被災地上映会をやろうと決めました。

被災地上映を行うための募金は20万円位すぐに集まりました。配給会社も無償で作品を出してくれて、スタートしたところで、コミュニティシネマセンターから声をかけていただき、「シネマエール東北—東北に映画を届けよう!プロジェクト」が始まりました。シネマエール東北の岩手県担当となり、上映に係る費用が確保されたことで、外での上映活動と映画館を並行して続けることができました。“ボランティア・スピリット”だけでやっていたら1年ももたなかったと思います。

この活動を続けるうち、映画館の中だけで仕事をしているときは考え方が変わってきました。それまでは、個人的に「映画を人に届ける」ことなんて考えていませんでした。映画館で上映して、お客さんを待っている。赤字になるとかならないとか、収支の数字を追うだけの毎日でした。映画を待っている人のところに届けて、すごく喜んでもらえるという体験ができたことは自分にとって、決定的なことでした。

映画館を維持するには家賃や人件費、光熱費など、基本的に大きな経費がかかります。なんとか映画館を続けられないか、どうしたら、お客さんに映画館に戻ってもらえるのか、考え続けて、震災後5年間、試行錯誤を続けてきました。震災前、観客数は22,000人前後で横ばいの状態が続いていて、2011年に16,000人になり、そこからなかなか伸びてこない。宮古市内は、ある程度、復興も進んでいたのですが、大槌、釜石、山田町といった地域は鉄路も復旧しておらず、高台の仮設住宅にいた人たちは町には降りてきづらい。それは今でも変わりません。もはや耐えられるような体力もなかったもので、2016年9月末でシネマエールを閉館することになりました。(興行館として閉館したが、みやこ映画生協は、現在もみやこシネマエールで、月に数回、「シネマエール〇月上映」を行っている)

岩手県内沿岸部の移動上映

もともと岩手県内の移動興行は、ふたつの会社が地域を分けてやっていました。震災後、移動興行の会場になるホールや公民館、学校等は被災したり、避難所になったりして、興行としての移動上映ができる状況ではありませんでした。2012-13年には上映のデジタル化の波が来て、移動上映もデジタル化に対応できるか否かが問題となり、県内の移動上映はほとんど止まってしまい、他県の移動興行会社が上映を行うようになりました。現在は、岩手県の移動興行会社もDCP対応のプロジェクトを導入して、沿岸部の公共ホールでの移動興行を再開しています。私たちは、震災以前はドキュメンタリー映画の移動上映は行っていましたが、劇映画の上映をしたことはありませんでした。震災後は、配給会社が無償で提供してくれる「ドラえもん」や「男はつらいよ」といった作品を中心にDVDで移動上映を行いました。2011年は1年で約100回上映会を行い、現在まで(約6年半)では、延べ500回以上になります。陸前高田から久慈に至るまで、沿岸部のすべての市町村に行きました。宮古市と山田町ではほとんどすべての仮設住宅に、大槌町でも半分ぐらいの仮設住宅に行きました。上映の場所は、避難所、仮設住宅から、現在は災害公営住宅の集会所がメインになっています。2017年は、様々な助成を得て、宮古市内で20ヶ所ぐらい、釜石市では釜石シネクラブと一緒に年間10-12回、大槌町でも10回ぐらい、岩泉町でも上映しました。ここは台風10号でも大きな被害があったところです。最近は、被災ということに関わらず、映画館のない地域で映画上映をしたいという気持ちで行っています。

文化なしごと創造事業

2012年度には、シネマエール東北の延長線上に「文化なしごと創造事業」(内閣府復興支援型地域社会雇用創造事業)が始まりました。これは、文化で起業する人を育てるという目的の事業だったのですが、コミュニティシネマセンターと、シネマエール東北の宮城県を担当した20世紀アーカイブ仙台、それにジャパン・フィルムコミッション、コンテンツ計画、teco.llcが立ち上げた事業なので、事業の内容は「映画」が中心になり、宮古と石巻、南相馬で実施した受講生の修了企画はすべて映画に関わるもので、それが、その後の上映活動にもつながっていきました。



宮古市内災害公営住宅での上映



みやこほっこり映画祭



みやこほっこり映画祭

「みやこほっこり映画祭」は、「文化なしごと創造事業」の修了企画として第1回目を開催しました。市民を巻き込んで、映画館では上映しきれない映画、ドキュメンタリーや若い監督の映画も含めて、映画を楽しめる日があるといいねということで企画がスタートしました。6回目となる2017年は、中村義洋監督を招いて特集上映も行いました。日本映画監督協会・映職連は、2015年までシネマエール東北の共催者であり、年に1-2回、みやこシネマラインと一関シネプラザで上映会を実施して、崔洋一監督をはじめ、映職連の方々が毎年ゲストで来てくれました。

みやこほっこり映画祭は、宮古の冬のイベントとして定着してきた感があります。新しいお客さんも増えていて、秋田など遠方から来られる方もいます。

地域の人に協賛をいただいたり、地域全体で映画祭をやっている雰囲気も出てきました。動員数はだいたい500人前後です。2017年は2日間、1日目は「シネマ・デ・アエル」、2日目は「みやこシネマライン」を会場として行いました。運営は楽ではありませんが、10回は続けたいと思っています。

アート・マネジメント・ワークショップイン 東北

2013年には、「アート・マネジメント・ワークショップイン 東北」(コミュニティシネマセンター/文化庁次代の文化を創造する新進芸術家育成事業)が始まりました。これは、座学と実習で上映者を育成する講座です。宮古では2013年から3年間継続して実施しました。そこに参加してくれた人たちが、その後、自分たちの地域で上映活動が続けてくれています。岩泉町から参加した人は、いまでは毎年、何度も上映会をしています。紫波町から参加した人は「シワキネマ」という定期的な自主上映をスタートさせ、大槌町の人は「大槌シネマキャラバン」という復興公営住宅のコミュニティづくりに映画を活かす試みをやっていますし、釜石では「釜石シネクラブ」ができて映画祭や定期上映会が始まりました。

三陸みらいシネマ―「みんなで作るコミュニティシアター～みらい座～」

「文化なしごと創造事業」が終わった後、この事業と一緒にやった人たちが中心となって、2014年に「三陸みらいシネマ」(岩手県教育委員会「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」)という事業を実施しています。この事業は、「映画プラス学び」ということで、映画を上映するだけではなく、語らいの場や映画のテーマについて勉強する場をつくる、そういう活動を、宮古や釜石、大船渡、岩泉などで行いました。これが、2016年の「みんなで作るコミュニティシアター～みらい座～」(復興庁「心の復興」事業等)へとつながっていきます。

釜石シネクラブ

「三陸みらいシネマ」事業では、釜石の人たちの協力を得て上映会を行いました。これを定期的にできないかという話が出て、カリタス釜石という認定NPO法人を中心に「釜石シネクラブ」という自主上映団体を作ることになりました。仮設住宅等での上映会を月1回行うようになり、現在では復興住宅の公民館等で定期的に上映をしています。釜石はもととたくさん映画館があった町なので、映画を見たい、見せたいという人が多く、上映会が開催される下地がありました。いま40歳前後の人たちでも、小さい頃に釜石の映画館で映画を見たという記憶は残っています。釜石シネクラブは、現在は被災者支援という枠で活動していますが、地域の人たちにも門戸を広げているので、被災者以外の人たちも来るようになっていきます。今年も月1回位のペースで開催していて、お客さんも平均40人は集まるようになり、定着してきました。

釜石てっぱん映画祭と釜石PIT

釜石てっぱん映画祭は2016年に始まりました。

新しい文化施設「釜石PIT」が2016年1月にオープンしたことが背景にあります。文化なしごと創造事業や三陸みらいシネマ、ワークショップのメンバーが集まったときに、ここで映画祭をやりたいという意見がでてきました。「釜石だからてっぱん映画祭だね」と話をしていて、釜石PITのオープンの際に、当時、財務省から出向していた副市長に「釜石PITで映画祭をやりたい」と申し出たところ、副市長も映画が大好きなので、「ぜひやりましょう」ということになり、トントン拍子に話が進みました。

第1回目の釜石てっぱん映画祭にはゲストに永瀬正敏さんに来てもらい、永瀬さんの作品を2本上映しました。濱マイクシリーズ『我が人生最悪の時』と『あん』です。ゲストを先に決めたわけではなく、上映作品をよく見ると永瀬さんが出ている作品が2本あることに気づき、ダメ元で永瀬さんに打診してみようということになり、長いお手紙を書いたわけです。永瀬さんは、震災後、大槌や釜石に支援に来られていて、変化した町の様子を見たいと言ってくださり、出演を快諾してくださいました。

2017年は、メジャー路線の『ラ・ラ・ランド』などTSUTAYAに並んでいるヒット作のようなラインナップになりました。古典の名作もいれようということで、去年は『ひまわり』、今年は『ローマの休日』を上映しました。

釜石市は他の市町村より、文化事業に対して意欲的などころがあります。2016年9月にみやこシネマリーンが閉館した後、DCP対応のデジタル映写機材を釜石PITに移設して、上映の幅はグッと広がりました。釜石PITでは、月に1回「シネ・ベッ」という定期上映会も自主事業として行われるようになり、作品によっては100人ぐらいお客さんが入ることもあります。

また、2017年には釜石PITの隣に立派な市民会館もできました。これらの文化施設ができた場所は、釜石の一等地で、釜石市は、ここをまちづくりの賑わいの中心としていくことを震災後のまちづくり計画の中で決めています。

岩泉町での上映

岩泉町は、岩泉の外から来たIターンの人が比較的多い町です。そういう人たちがまちづくりに積極的に関わっています。その中に「スローフード岩手」の事務局をやっている人がいて、震災前から『タイマグラバあちゃん』『水になった村』や『千年の一滴 だししょうゆ』など、食に関わる上映会を岩泉で一緒にやっていました。その人の奥さんが「アート・マネジメント・ワークショップイン 東北」を宮古でやった際に参加してくれました。

その後も、何度もシネマリーンに映画を見に来てくれて、『生まれる』というドキュメンタリーをみやこほろり映画祭で見て、ぜひ岩泉町でも上映したいということで、岩泉でも『生まれる』を上映しました。それからは『風の波紋』や『ふたりの桃源郷』『いただきます〜みそをつくる子どもたち』『夢は牛のお医者さん』など、ドキュメンタリー映画の上映会を次々に企画しています。それ以外にも、夏には商店街で野外上映をしたり、この前はLGBTをテーマにしたイベントを企画して、関連の映画も上映しています。



釜石つばん映画祭



岩泉LGBT上映会



シネマ・デ・アエル



大槌シネマキャラバン



岩泉の人たちは、補助金の情報などアンテナを張って、申請して予算を確保して、上映会を実現させている、その実行力が素晴らしい。

アート・マネジメント・ワークショップイン 東北が地域の上映者を育てる種を蒔いてくれたと思います。いろんな形で上映を行うことが可能なんだということに気づき、実践している。そういうことが定着している実感があります。

大槌シネマキャラバン

大槌シネマキャラバンは、2017年2年目で、年に10回ほど、新しくできた公営住宅の集会所などで小規模な上映会を行っています。自主上映会というより被災者支援上映会という形です。この活動の中心となっているのは、震災後に支援活動で大槌にきた人で、いまでは大槌に住んでいます。シネマキャラバンは映画を見てもらう場を作る方法としても、コミュニティ作りのひとつとしても、とても大切な活動だと思います。

大槌町では、いま町民文化交流センターの建設が進んでいて、私も上映会を行うのに必要な機材のことなどをお話しました。大槌は入場料が有料だと公共施設を借りることができないという問題があります。有料で行われる文化事業があるのは常識であり、なんでも無料でなければ公共的じゃないという考え方は、現在の状況にはそぐわないと思います。

「シネマ・デ・アエル」

「文化なしごと創造事業」「アートマネジメント・ワークショップイン 東北」「三陸みらいシネマ」「みんなでつくるコミュニティシアター〜みらい座」といった事業が継続する中で生まれたのが「シネマ・デ・アエル」という上映の場所です。

みやこシネマリーンの閉館することが決まって、一緒に活動していたメンバーの人たちが、これから映画の上映の場をどうしようかと考えながら街なかを歩いていたときに、中心市街地に使われていないかつての酒蔵があるのを見つけました。蔵の周りには駐車場になっている広いスペースがあって、とてもいい場所です。「東屋」というこの蔵

の家主さんがとても協力的で、トントン拍子で提供していただくことが決まり、ここに上映の場をつくることになりました。2016年12月のみやこほっこり映画祭が、「シネマ・デ・アエル」のお披露目となりました。そのときはまだリノベーションができておらず、暖房機器もストーブのみで、非常に寒かったのですが、その後、DIYで大幅に改修・改装し、居心地のいい環境になりました。

現在は、有志のボランティアメンバーで月に1〜2回上映を行っています。ここは、すでに「みんなの場所」になっていて、メンバーで上映会を運営していて、私が行けないときには映写も自分たちでできるようになっています。中心メンバーは10名ほどで、宮古の人が中心ですが、大槌シネマキャラバンや釜石シネクラブの人も参加しています。

このように定期的な上映会が続けられるだけのメンバーが集うことができたのも、映画館があり、映画祭ができて、ワークショップもでき、ネットワークができたからだと思います。皆さんボランティアですが、責任の重い役割を担い、作品も順番に選んでいます。自分で選んだ映画が上映されると、真剣に作品を選ぶし、上映会にも一生懸命取り組んでくれます。シネマ・デ・アエルも釜石での上映の取り組みとともに、震災後に生まれた大変いい成果だと思っています。

紫波町「シワキネマ」

盛岡市の隣に紫波町という町がありまして、ここから宮古のワークショップに参加してくれた方がいらっやいました。みやこシネマラインにはよく映画を見に来てくれていたようで、ある作品を上映したときに、DCPの音声データが消えてしまって上映を取りやめるといった事態になったことがあるのですが、そのとき「私は画だけでもいいので見ます」と言ったお客さんがいて、それが紫波町の彼でした。その時は全然知らなかったのですが、震災後のワークショップで出会い直したというか、あんな映画狂に出会えるなんて、運命の出会いのように思います(笑)。盛岡で「高松の池映画祭」や自主制作の短篇を上映する映画祭等をしていて、2015年に自主上映団体「シワキネマ」を立ち上げて、定期的に上映会を行っています。

シワキネマは集客力が素晴らしく、入場料でほぼすべての経費を賄うことができています。その根性がすごい。最近の『人生フルーツ』の上映は、1回目が130人で会場のオガールプラザがほぼ満席でした。アキ・カウリスマキ監督の映画は赤字だったようですが、次の上映で黒字にしたようです。『ある精肉店の話』や『夢は牛のお医者さん』など、最初はドキュメンタリーを中心にやっていましたが、現在は、定期的にいろいろな映画を上映しています。

盛岡〈映画の力〉プロジェクト——吉里吉里海と森の映画祭

〈映画の力〉プロジェクトは盛岡の人たちが、震災後に映画を使って町を元気にしようと立ち上げた団体で、プロジェクトの中心メンバーが、『るろうに剣心』の大友啓史監督の同級生であったことから、岩手県ゆかりの映画や岩手出身の監督の映画を、盛岡のみんなで応援しようと、いろんな企画を立てて活動しています。宮古で撮られたドキュメンタリー『廻り神楽』の盛岡上映の際にも告知や前売り券販売等をいろいろな形で手伝ってくださり、本当に助かりました。

大槌町の吉里吉里の若旦那の会と〈映画の力〉プロジェクトが一緒になって、2015年から、吉里吉里で夏の野外上映を行っています。メンバーの同級生が大槌町役場に出向していて、大槌でも上映会やりたい、それも海でやりたいということで、砂の芸術祭と一緒に野外上映会を行っています。吉里吉里には本当にきれいな砂浜があるので、子どもたちと一緒に砂でいろんなものを作るイベントや、ステージではフラダンスや吹奏楽をやり、夜は野外上映、大槌の海で獲れた牡蠣やホタテ、吉里吉里の地ビールなど美味しいものの屋台が並びます。1日限りの映画祭なので上映作は1本です。波の音と映画の音と同時に入ってきて、とても盛り上がります。

上映者のネットワーク

震災前は、宮古、大槌、釜石、岩泉、紫波、盛岡など上映者のつながりは全くありませんでした。震災後、こんなに



吉里吉里映画祭



ネットワークができるなんて、本当にすごいと思います。作ろうと思ってできたわけではなく、いろいろな上映会やワークショップに関わった人たちが、だんだんと自分たちの力で上映活動を始めて、うまく繋がったという感じがします。岩手の場合、2011年の時点では沿岸部には映画館はシネマリーンしかありませんでした。それと大きな移動上映が点々と1年に1回行われていたくらいです。お客さんの数は震災前のほうが多かったかもしれませんが、現在のよういろいろな場所で、地域の人自身が関わる上映会が行われるようになって、本当によかったと思います。震災までは地域の方たちと上映会を作るなんて、全く考えていませんでした。結果的に、ある意味ではゼロから1を作り出したと言えると思います。震災以降に得たものは私にとって本当に大きな価値をもっています。

これからのこと

沿岸部では、釜石以外に、陸前高田にもコミュニティホールが高台にできました。宮古の文化会館は被災しましたが早めに改修できて再開しました。久慈のアンバーホールは被害はほとんどなく、大船渡のリアスホールは、一時は避難所になっていましたが早めに文化事業が再開できています。大槌町では、町の中心に図書館の機能を備えた総合文化施設が建設中です。沿岸部を走る山田線は2019年3月に全線復旧の予定です。JRが直して三陸鉄道に譲渡して、久慈から宮古・山田・大槌・釜石・大船渡まで“三鉄”でつながります。山田町も大槌町も、山田線の復旧をにらんで、沿線にいろんな施設を配置しています。

岩手県の映画館の観客数は震災前の水準に戻っています。他方、沿岸部では震災前から続いていた人口の減少に拍車がかかり、5年間で10%以上減少しているところもあります。そういう状況で、どのように文化事業を維持していくのか、考える必要があります。

映画(貸出)料は安くありません。比較的安価な、新作・話題作ではない映画を見にきてもらうには、どうしてもこれを見せなければいけないという強い気持ちが必要で、年1回位なら赤字でもできますが、定期的に継続することを考えると、公的な支援がないと厳しい。公的な支援といっても小さな町や市でも負担ができる程度のもので十分だと思います。それで上映会は可能になります。上映会は、多くの場合、ボランティアの人が担っていますが、本来は有給のスタッフも必要です。町役場の人がやるということではなく、ある程度、専門性を持ったスタッフが育つ環境があればいいのですが、なかなかそういうところに予算は充当されないのが現実です。釜石の「シネビット」の定期上映は文化庁から補助金を得て実施していますが、いつまで補助金が続くのかもわかりません。

これからは、新しいことを始めるよりも、いまやっている、シネマリーンやシネマ・デ・アエルでの上映活動を軌道に乗せられるようにしたいと思います。そもそも、よほどのことがなければ映画料と会場費を払ったら入場料収入は残りません。赤字になることがしばしばで、現在も、その他の事業収入を赤字に充当するということで何とかできている状

況です。2017年度でシネマエール東北や日本アカデミー賞の支援もひと段落となります。今後、どのように活動の予算を確保するか、それが大きな悩みです。

そうはいても、映画上映はお客さんが来なくては成り立たないというのが大前提であることも確かで、観客開拓は永遠のテーマです。いま、シネマリーンに来られる方は大半が常連のお客様で、大変、映画が好きな方たちです。映画の楽しさをうまく伝えられる人がいると、もう少し輪が広がる気がします。映画の魅力を語り合える場は必要ですね。人口の減少を止めることはできませんから、映画をコミュニティづくりに活用することも大切ですし、何よりも映画が好きな人、映画好きを増やすことが一番重要ですね。当たり前のことですが、「いい映画」を選び、上映することが大切かなと思います。

2017年12月19日 聞き手 | 岩崎ゆう子

櫛桁一則 | みやこ映画生活協同組合 常務理事

岩手県久慈市出身。建築設計事務所を経て、2006年より「みやこシネマリーン」の支配人をつとめる。2011年3月11日の東日本大震災以降、宮古市のみならず、久慈、岩泉、野田村、大槌町、山田町、釜石、大船渡、陸前高田等、沿岸全域で上映活動を行い、「みやこほっこり映画祭」、「釜石てっぱん映画祭」等の開催に尽力し、岩手県沿岸部の上映者の育成、ネットワークづくりにも取り組んでいる。2016年毎日映画コンクール特別賞受賞。「みやこシネマリーン」の閉館(2016年9月)後も精力的に上映活動を継続している。